異世界英雄伝説

梶本俊貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界英雄伝説

【Ｎコード】
Ｎ５６６５Ｋ

【作者名】
梶本俊貴

【あらすじ】
人間失格のダメ主人と、美しい最低のダメ使い魔のドタバタ騒動。笑い（？）あり、シリアスあり、涙ありのハイファンタジー。ふざけた作品ですが、一応テーマはあります。

＊
描写はあまりありません。
会話主体で進めております。

第一話一切　説明も糞も無しでいきなり始まるファンタジー（前書き）

一応、学園ファンタジーと構想しています。

第一話一切　説明も糞も無しでいきなり始まるファンタジー

空は相も変わらず青い。

倉野　京二郎は天を仰ぎ、心中で呟いた。雲一つ無い蒼天には種類も分からない鳥が飛んでおり、京二郎の心を僅かに癒す。

（ああ、青い。空は青いなぁ……）

まるで死人のような目で空を見る彼の口はポカンと開いていた。周りは木々に囲まれ、整備されていない事から山の外れた場所と推測出来る。それ以外に観察しろと言われても、今の京二郎の精神状態で無理であった。

その時、京二郎の横から声が聞こえてくる。

「現実逃避ですか。えぇ、出来れば俺もしたいですよ、このダメ人間」

声の主は十代後半と見える若い青年。男には似つかわしくない長く艶やかな白銀の髪を後ろでくくり、これまた男とは思えない程美しい顔立ちをしている。しかし病的な肌の白さは、彼から人間らしさを奪っていた。更に、なぜか女物のような着物を着ている。

そんな青年の言葉に反応し、京二郎は魚の死んだような目を青年に向ける。

「ほら見ろよ、外道丸。鳥が飛んでるよぉ。アハハハハハ……」

「とうとう壊れましたか」

外道丸と呼ばれた青年の言う通り、京二郎の様子は壊れたと言うしか無い。目は死に、訳の分からない方向を見ている。顔から生気が失っているのを見ると、もう末期だ。

だが、京二郎の傍らにいる外道丸は周りを冷たい表現で観察していく。現状を再確認した外道丸は、冷や汗を垂らした。

二人の周りにいるのは、凶悪な牙を剥き出しにしている獣。犬が一番近いが、犬などよりも獰猛な見た目をしている。赤く、瞳孔の開いた目は二人を射抜き、今にも襲ってきそうな殺気を漂わせていた。

（……）

京二郎は冷や汗を垂らしている外道丸を、チラリと見る。彼は自分よりも周りに注意を配り、自分には視線の一つも送らない。

次に、獰猛な犬の配置。僅かに偏りの見られる配置から、京二郎は突破口を見出だした。しかし、それは小さく、とても二人では突破出来ない。

口角を上げ、壊れた『フリ』をする京二郎。

そして――

「腹ががら空きじゃァァァ！」

「ゴフゥッッ！」

外道丸の腹を力の限り蹴り、一番犬が偏っている場所へ飛ばした。

「ハッハァァァァ！　大切なのは自分の命じゃァァァァ！」

京二郎はこれでもかと表現を嫌らしい笑みに変え、犬が少ない方向へ走り出した。犬は最初に動いた外道丸に飛び掛かっていく。

「貴様ァァァァ！　この腐れ外道が！」

外道丸は、鬼のような形相で京二郎を睨み付けるが、当の京二郎は逃げる事に必死。気付いた頃にはもう包囲網を突破していた。

「外道と名の付く悪鬼に言われたかねぇんだよ！」

振り向きもせず、叫ぶ京二郎に外道丸は怒気の籠った声を腹から

出す。

「ブッ殺ォォォォス！」

第一話二切　真に恐ろしきは（前書き）

実はこの小説、友人が中学生の頃に考えたモノです。

第一話二切　真に恐ろしきは

倉野　京二郎は学生である。それも、魔術という不可思議な技術を学ぶ。

彼はこの日、課題である仮想魔物の討伐をしていた。魔物とは、『魔法』を使える動物の事である。様々な種類がいて、中には可愛らしい愛玩動物のような魔物もいた。

仮想魔物は人工的に造った意思を持たない魔物。もちろん、『魔法』もどきも使える。

正直、京二郎は仮想魔物の討伐なんて面倒な課題はしたくない。それでもする理由は、この課題に留年がかかっているからだ。彼の成績は低く、遅刻も多い。更に学校から問題児として扱われているから、尚悪い。

そうして、学校が用意した場所で学校が用意した魔物を狩る事になったのだが、一つ問題が発生した。教師の怠慢か、用意されていた魔物が話と違う。

普通は危険の少ない魔物なのだが、今回はとびきり危険度の高い魔物がそこにはいた。京二郎にしてみれば最悪である。

更に最悪なのが京二郎の相棒である外道丸で、彼は京二郎の使い魔だ。使い魔とは何か、一言で片付ければ相棒。これ以外に無い。

その外道丸が京二郎の課題に付き合わされるのは必然のようなもので、今は京二郎を恨みに恨んでいる事も必然のようなものだ。

これまでの事を思いだし、京二郎は思う。

（大体、魔物討伐なんて将来で何の役にも立たないし。俺は悪くないし。いや、そもそも悪いのはこんな状況を作り出した教師なわけで……）

ダメ人間そのものである。こんな状況は作り出したのは教師ではなく自分だという事に気づいていない。更に、「数学なんて将来使わないっての」というアホな学生の思考。更には責任転換。極めつけは自分の相棒を糧に自分だけが助かる、という始末。

後ろで何やら叫んでいる相棒の声と、魔物の凶悪すぎる叫びを聞きながら、京二郎は走り続ける。課題なんてもうどうでも良い。学校が用意したものだから死にはしないが、攻撃されればそれなりに痛い。痛いのは嫌いだ、という京二郎の思考が彼を逃げの一手に導いたのである。

そうこうしている内に、京二郎の耳にハスキーな女性の声が聞こえてきた。

「アンタは何やってんだ！　ねぇ、普通は使い魔と、この試練を乗り切るでしょ！　それが主人公ってもんじゃない！？」

「あ、ファイ先生。外道丸君が僕の代わりに死地へ飛び込んでくれました。彼の事は一生忘れません。彼の分まで力強く生きてみせます」

「死んでないからね！？　え、なに、いつの間にか自分は悪くないみたいな感じになってない？　違うからね、何から何までアンタが

悪いからね！？」

声、もといファイは京二郎のどこまでも身勝手な発言に、キレ気味で叫んだ。

ファイは課題をしている京二郎の観察役で、魔物を呼び出した張本人。今もどこかで観察しており、京二郎のあまりにも非道の行いに口を出した、といったところだろう。

そんなファイに、京二郎は走る事を止めて不機嫌な表情を作った。後ろはきっちり確認済みだ。

「あのね、そもそもファイ先生があんな魔物にするからさぁ、話が違うじゃないかい？　それなのに俺を責めるたぁ、どういう了見だこの三十路。犠牲になった外道丸が不憫で仕方ない」

「う……まあ、それはこちらのミスだ。仮想魔物はこちらで処分しよう。っていうか何気に悪口言ってるよね。三十路じゃなくて三十路手前じゃバカヤロー」

「もう三十路も三十路手前も一緒じゃん？　どうせしばらく結婚出来ないんだからさぁ」

「単位落とすぞコノヤロウォォォォ！」

彼女が激怒するのも分からなくは無い。

そして、京二郎は外道丸が気になり、再び憎たらしい表情を作り後ろを振り向く。

「え……？」

視界に入ってきたのは憤怒の表情でこちらに爆走中の外道丸。更に、後ろは魔物の群れ。

「京二郎ォォォォ！」

真に恐ろしいのは人の執念である。

第一話三切　教師というのは生徒が大事だ（前書き）

一つ１０００文字程度です。これからもこのスタイルは貫きます。
あと、この作品はある小説に影響されて書きました。おそらく誰も分からない……。
もちろん、設定は友人のパクりで。

第一話三切　教師というのは生徒が大事だ

「来るなァァァァァァァ！　来るな来るな来るな！」

「テメェも道連れじゃぁ！　腐れ外道がァァァ！　ハハハハハハハ！」

半泣きで走り始める京二郎は、思いっきり叫ぶ。

「誰か助けてくださぁぁぁぁぁぁい！」

危険のど真ん中で助けを請う京二郎に、ファイは楽しそうな声を発する。

「ははは、いい気味だな。復讐に燃える鬼と凶悪な魔物。二つに追いかけられて逃げられるとでも？」

「ブッ殺すぞ三十路女！　いいからあの犬っコロどうにかしろよ！　だから婚期逃すんだよ！」

京二郎の暴言に、ファイは先程までの怒りも忘れたようで、愉快愉快と笑っている。この教師、生徒を何だと思っているのだ。

「おいおい、それが人にモノを頼む態度か？　地面に頭叩き付けながら、『お美しいファイ様、どうかこの卑しい豚野郎をお助け下さいませ』くらい言えよ」

「テメェ本当に教師かァァァ！？　こちとら切羽詰まってんだよ！　もう必死なの！　生きるか死ぬかの瀬戸際なの！」

走る走る。後ろに迫る二つの脅威から逃れようと。だけど京二郎の体力はさすがに、限界に近づいていった。外道丸は執念だけで体を動かし、魔物は有り余る体力で京二郎へ近付いていく。

そして、とうとう外道丸の手が京二郎の肩を捕えた。

「捕まえたぁ……！」

勢いに乗っていた京二郎の体は倒れ、外道丸もまた力尽きたように倒れた。両者共に体力の限界を軽く超えている。

既に外道丸は悟りを開いたような表情で天を見ているが、京二郎は這いつくばりながら逃れようとしていた。だけど外道丸の手によって逃亡は阻止される。

「逃げてはいけません。世の中、諦めが肝心です」

「生きる事は諦めたくないよ！」

外道丸の非情な言葉に、京二郎は涙目になる。既に魔物は彼らに牙を突き立てようと、すぐ傍まで来ていた。

冷静に考えれば死ぬはずはないのだが、今の二人に冷静な思考をしろ、というのはあまりに酷である。

しかし、そんな二人に希望の光が。

「いやー、久しぶりに大笑いした。中々楽しませてもらったぞ。ま

あ、本格的にヤバそうだから助けてやるか」

「ファイ先生ェェェ！　愛してます！」

「キモいんだよ、ダメ生徒」

ファイが京二郎を貶す言葉を発した瞬間、辺りは光に包まれた。京二郎と外道丸は思わず目を閉じ、条件反射で互いに抱き締め合う。

数秒後、恐る恐る目を開けると、そこには妙齢の美女が立っていた。肩まである金髪に、白い肌。瞳の色は青く、知的な顔立ちをしている。眼鏡をかけ、スーツを着ている姿はどこかの社長秘書のようだ。

「あぁ、女神のようだ」

「なんて神々しいのでしょう」

前者が京二郎、後者は外道丸である。彼らにとって美女は女神に見えていた。

が、彼女は知的な表情を嫌らしい、京二郎にも似た笑みに変える。

「そうだ、敬え豚共。麗しのファイ先生が助けに来てやったんだからなぁ」

美女――ファイは余裕の態度で魔物と対峙した。

第一話四切　見渡せば外道と鬼

「ファイ先生、ご主人の頭がかじられています。血が垂れてきました。心なしか顔色が死人のようです」

外道丸は横にいる京二郎を見やり、冷静に言った。当の京二郎は涙を流し、無言でファイに助けを求めている。頭には犬の牙が食い込んでいた。。

「……ご主人？　誰それ。アタシとアンタ以外に誰がいるんだい？」

「横にいます。頭から赤い液体を流している人間がここにいます」

「横？　あー、その生ゴミか。それはね、この世の廃棄物だから良いの。だから、怪我したとしてもアタシの責任じゃなくて、全て魔物の責任だから」

「なるほど、現実逃避とは。貴女はそれでも教師ですか」　外道丸とファイが会話をしている間にも、京二郎のダメージは蓄積されていく。白目を向き、出血は冗談じゃ済まされないくらいにはなっていた。

それを見て、ファイはどんどん顔を青くしていく。

「このままだったら先生の責任問題。処分は免れませ――」

「チェストォォォォ！」

凄まじい威力を孕んだ飛び蹴りが魔物の横腹に直撃。魔物は血を

吐きながら飛んでいく。

「はぁ、はぁ……可愛い生徒には手を出させん！　この魔物共が！」

「アンタ最低だよ」

冷や汗を垂らしながら叫ぶファイに、外道丸が京二郎に代わって呟いた。

外道丸の言葉をスルーし、ファイは魔物の群れに相対する。数はおよそ１２体。このタイプの魔物は足が速く、尚且つ鋭い牙を持っているのが特徴だが、弱点が明白だ。それは防御力不足である。攻撃に関してならそこそこだが、この魔物は強烈な蹴りを入れただけで、それが致命傷になるくらいひ弱だ。

もちろん、並の人間には勝てない。ファイは対魔物戦闘学の教師であり、こんな魔物に遅れを取るはずがないのである。

ファイはまずポケットから紙を取り出した。白い紙には何やら意味不明な紋様のようなものが書かれている。

そして、紙が光ったと同時に叫んだ。

「還れ！」

瞬間、先ほどファイに倒された魔物以外が消え去った。何のアクションも無く、消えたのである。

その様子を、外道丸は無表情で見ていた。

「っていうか、別に最初からそれをすれば良かったんじゃありませ

んか？　無駄に犠牲者出して楽しいですか、この雌豚」

彼の言葉に、ファイは青筋を浮かべて肩を震わせながら返した。

「誰に口聞いてるんだよ、無表情ダメ使い魔。覚悟は出来て――」

「痛い痛い痛い！　いてぇなぁ！　こりゃ出血多量で死んじゃうかも！　あぁ痛いなァァァァァ！」

「え……？」

急に、京二郎が息を吹き返した。それも、何やら嫌な予感がする事を叫びながら。ファイは頬をひきつらせながら疑問符を浮かべる。

「ちょっとさぁ、これって教師の責任だよねぇ？　そうだよね、外道丸ぅ」

「ええ。間違いありません。厳重に罰するべきですね」

本格的に嫌な会話を繰り広げる二人を見て、ファイは冷や汗をダラダラと流す。もうこれから彼らが言う事もなんとなく分かる。

それは――

「どう責任取るつもりですかぁ？　せ・ん・せ・い」

京二郎は語尾にハートが付くような鳥肌の立つ口調で言い、

「ご主人、そういえば腹が減りました。ついでに肩も凝ってきまし

たね。ああ、それとご主人の治療費も工面しなければなりません。貧乏な俺達にとっては生きるか死ぬかですね」

外道丸は滲み出る腹黒さを隠す事も無く、言い放った。

第一話後切　星は落ちる、怒りと共に

◇◇◇

ああ、今日も平和だ。などと現実逃避。

ファイ・クランは今自分が置かれている最悪の状況に心が折れそうになった。昨日の課題、あれさえ無ければ、と後悔する。だけど現実は変わらない。

昨日、ファイはらしくない失敗をしてしまった。いや、あんな失敗は初めてだ。生徒を危険にさらすなど、彼女にとっては初めての経験である。

これまでは慎重に慎重を上塗りして対魔物戦闘の授業を行ってきた。対魔物戦闘は命の危険は無いものの、怪我に繋がる。いつもは生徒を監視し、少しでも危険と思えば助けに入っていた。それに、ある意味油断していたのかもしれない。

対魔物戦闘で使用する魔物はファイ自身が作製したもので、危険が無いのも分かっている。

ファイは職員室の端にある自分の席で頭を抱えた。失敗は誰にでもある。だけど、失敗のタイミングは最悪だ。よりによって最悪の二人に失敗を見られてしまった。

（なぜだ……）

なぜこうなった。今思い返しても、分からない。使用する魔物の

点検は前日にしており、種類を間違えるはずが無い。

自問自答を繰り返し一時間。ファイは打開策を見いだそうとするが、冷静さを失った今では見つかるはずもなかった。

はぁ、とため息をつき遠くを見る。焦点が定まっておらず、心ここにあらずだ。

そんなファイを見て、隣の席で真面目に仕事をしているファイの同僚である教師が声をかけた。

「陰気臭い顔してるわね。こっちにまで臭ってくるわよ」

「意味の分からん事を言うな……」

ファイは隣の同僚に視線を移した。艶やかな黒髪を真っ直ぐに伸ばしており、優しげな垂れ目が印象的な女性。肌はファイと違い黄色系である。

「あら、元気じゃない。てっきり好きな人にフラれたのかと思ったわ」

「阿呆、十代のガキじゃないんだから」

「まあ、三十路だしね」

「美鈴よ……アイツと同じ事を言うな、カリカリしてんだから」

「アイツ？」

再び重いため息をついたファイに、美鈴と呼ばれた女性は不思議そうに首を傾げる。

「ああ、あの問題児だ。美鈴も知ってるだろう、倉野京二郎という生徒」

「ああ、あの面白い子ね。この間、私をオバサンと言ったから愛のムチをプレゼントしたわ」

そうか、と呟いたファイはふと自分の机にある引き出しに目がいった。眉をひそめ、開けてみる。

「は……？」

思わず声が出てしまった。それに対し、美鈴は興味がわいたのか引き出しを覗き込んでくる。

が、そこには数枚の紙以外は何も無い。美鈴は期待を裏切られた不満からか、口を尖らせながらファイに言う。

「何も無いじゃない」

「ああ。何も無い。それは別に問題じゃないんだ。ここには試験用の魔物を入れていたからな。問題なのはこの引き出しが開いている事だ。更に、紙が減っている」

紙を手に取り、よく観察する。これはファイの造った魔物を収納する物であり、書かれている紋様によって収納している種類が分かる。

そして、紋様を見たファイは目を見開いた。

「やってくれたな……」

それを見た瞬間、ファイは全てを理解する。なぜ自分が失敗したか、その理由を。

「どうしたの？」

「ちょっと人生について考えてくる」

そう言って席を立つファイを、美鈴は不思議そうに眺めていた。

第一話後切　星は落ちる、怒りと共に（後書き）

京二郎と外道丸を目の敵にする風紀委員。彼等の顧問はファイ先生であった。

非道な行いは許さない。風紀を乱す者には鉄槌を。

今、風紀委員と京二郎＆ａｍｐ；外道丸の戦いが始まる。

と、予告風に書いてみました。そんな大した話でも無いんですけどね。

第二話一切　あ、一緒に逝きます？（前書き）

いやぁ、十時間くらい前に間違えて投稿した時は焦りました。
しかも気付いたのが今、っていうのも致命的ですね。

今後、こういう事は無くしますので、よろしくお願いいたします。

第二話一切　あ、一緒に逝きます？

「えぇ、私なんて生きてる価値も無いゴミ虫だって事は理解してるんです。馬鹿な私でも。だからこそ、生きていて害しか及ぼさないゴミ虫は、死んで世界中にいる生物達に謝ろうとしてたんです」

倉野　京二郎は目の前で丈夫そうな縄を持つ女子生徒を見て、鳥肌が立った。直感的に彼女がヤバい人種の方だと理解したのだ。

ここは京二郎が通っている学校の中庭。周りは木々や花といった自然に囲まれ、青い空が広がっている中庭で陰鬱な雰囲気を出している女子生徒は、輪のある縄を持ち虚ろな表情をしていた。

逃げようとする京二郎だが、少しでも動こうとすれば女子生徒の虚ろな表情は京二郎に向く。こういう危険な人物は何をするか分からない。そんな恐怖心から、逃げ出せないでいた。

どうしてこうなった、そう自問自答をする。昼休み、自分のクラスに嫌気が差した京二郎は外道丸を置いて中庭にやって来た。

そして木に縄をかけ首を吊ろうとしている女子生徒を見つけ、しばらく眺めていた。

しかし、女子生徒が首を吊る事は無かった。いや、吊ろうとしているのだが、木が折れてかなわない。高い位置から落ちた彼女は血だらけである。

京二郎は女子生徒良く見てみる。黒髪を腰まで伸ばし、前は目が隠れる寸前だ。肌は白く、見た目はまるで幽霊である。それもまた

京二郎の恐怖心を扇いだ。

八方塞がりとはこの事だ。逃げ出したいのは逃げ出せない。更に女子生徒とコミュニケーションをとろうとしても意味不明な鬱状態に入って会話が出来なかった。

この人物に関われば必ず災いが起こる、と脳が危険信号を発するがどうにもならない。とりあえず、今は彼女と正常な会話をするしかないと、京二郎は口を開いた。

「あのー、ほら、そんなネガティブな事はあんまり言わない方が……」

「いえ良いんです。私なんて生きてる価値無いですから。貴方のような人間様に詫びる為、このゴミは今すぐあの世へ行きます」

……会話にならないのは分かっていた。段々と鬱オーラが濃くなっていく。別に京二郎は誰が死のうが良いのだ。自分に害を及ぼさない程度で、だが。

女子生徒のやり取りを経て、ようやく京二郎もプッチンと何かがキレた。キレる若者だ。

「あァァァァァ！　めんどくせぇ！　お前何なの！？　まじで何！？　怖いんだよ！　もう死ねって！　早く死ねって！　ほらほら、死んでくれよ」

後半は訳が分からなくなった末に出た言葉で、言った瞬間に京二

郎は後悔する。この人種は何をするか分からないのだ。

実際、女子生徒は暗く陰鬱な目を京二郎に向けている。黒い瞳からは感情が読み取れず、本能的な恐怖心を呼び起こし、京二郎は一歩だけ後ずさった。

「ひぃっ！」

そして、女子生徒も一歩だけ京二郎に近づき、京二郎は情けない声を出した。まあ、誰だって怖い。

「貴方……貴方様は……」

体を揺らし、俯きながら近付いて来る彼女に、京二郎は逃げようとするが、足が動かない。

「なんで！？」

「ああ、それは魔法ですよ。心の優しい貴方様……。私のような牝犬と一緒に死んでくれる貴方様……」

「はぁ！？」

何だこれは。このブッ飛び少女は何をどう解釈してこの結論へ至った？　京二郎は『魔法』という言葉を無視して、ひたすら彼女が言った一緒に死ぬ、という言葉の意味を考える。

「来ないでェェェ！　死ぬぅぅぅ！」

ここで、初めて少女に笑みが宿る。笑み、と言っても狂気の孕ん

だそれである。

「あはっ。ええ、一緒に逝きましょう、地獄へ」

「いやいや、なに旅行に行くみたいな気軽さで言ってんの！？　地獄にお土産は売ってないからね！？　それに、死ぬのなら天国にいくわ！」

平和な昼下がり、外道が一人。天罰がくだされようとしていた。

第二話二切　バンザァァァァイ！（前書き）

覚悟してお読み下さいませ。私は一切の責任を放棄してこれを書きました。批判も甘んじて受けましょう。

第二話二切　バンザァァァイ！

倉野　京二郎（１８）。類い希なる変人であり最低の精神を持つ青年。色々あって順風満帆とはいかないまでも、血みどろな世界とはおさらばし、平和な学生生活を送っていた。

しかし、ここに脅威が一つ。今まで命の危険を感じた事はあった。イカれた人物には出会った事もある。だけど、目の前の女子生徒は彼が出会った中でも特異な少女であった。

京二郎は動かない足を半泣きになりながら叩く。逃げなければ確実に殺されるであろう。あの目は本気だ。人殺しの目とは、独特である。誰もが瞳の奥に獣を飼っており、この世の腐敗を一身に受けたような目。少女はまさにその目を持っていた。

京二郎はこの目を見るのが初めてではない。だから分かるのだ。この少女は普通じゃない。ただのブッ飛び少女ではない。

これは――人殺しの目だ。

死ぬのも痛いのも御免な京二郎はどうにか逃げ出そうとするが、やはり動かない。

「ちょ、ちょっと落ち着こう、ね？　話す余地はまだあると思うんだ、だけど」

舌がうまく回らなかった。逃げるのが無理ならば、足が動かないなら口を動かそう。そうして危機を脱する、という選択肢をとった京二郎。

しかし、少女は狂人めいた笑みを深くする。

「話し合う余地なんてありませんよぉ。ゴミはゴミらしく死ぬだけです。それに貴方様は私と死んでくれるのでしょう？」

「誰がそんな事言いましたかァァァァァ！？」

焦りに焦っている京二郎は、刺激してはいけないと分かってはいるものの、思わず叫んだ。それがいけなかったのか、少女は恍惚とした表情を見せる。

「その声、貴方様も興奮してるのですね……」

「人の話聞いて！？」

と、京二郎はそこで違和感を覚えた。しかしそんな違和感はどうでも良いと、「助けて下さい！」などと叫ぶ。

その時、辺りに奇声が響く。

「ファイトォォォォ！」

「イッパァァァァツ！」

瞬間、少女の体が飛んだ。凄まじい衝撃を与えられた少女は首を吊ろうとした木にぶつかり、ぐったりとする。

そして、少女がいた場所には二人の少年が立っていた。両者共に黒髪に肌が白い。更に目立ちの整った美形である。そして、彼らの

顔は瓜二つであった。違う点と言えば、一人は眼鏡をかけて垂れ目になっており、もう一人は鋭い目をしている。

二人は少女を見て、笑顔で腕を組んだ。

「よし！」

「何がよしじゃあァァァァ！」

同じ声、同じテンポで言った二人に、思わず京二郎は突っ込んでしまった。

そのツッコミに気付き、二人が同時に京二郎へと視線を移す。鋭い目をした少年は訝しげに京二郎を見ていたが、眼鏡の少年は申し訳無さそうに頭を下げた。

「妹がとんだ失礼をしました。きつく叱っておきますので、ご容赦を」

「え、意味分かんなーい。妹ですって？　この女の？」

「はい、僕は次男の月代　阿雲（つきしろあうん）と申します。こっちは三男の李織（いおり）で、そこに倒れているのが次女の月絵（つきえ）です」

もう展開が早すぎてついていけない。この画面を見ている方々もついていけないだろう。

京二郎は訳の分からないこの展開に、ある一つの言葉が思い浮かんだ。

「主人公補正バンザァァァァイ！」

第二話二切　バンザァァァァイ！（後書き）

最近になったツンデレの意味を教えてもらった若いオジサンがここにいます。

あ、あんたの為に書いたんじゃないんだから！（間違っていたらすみません）

第二話三切　企みと気付きについて

意味の分からない事を叫んだアホを見て、眼鏡をかけた方の少年――阿雲が柔らかい微笑みを返す。おそらく意味は分かっていない。もう一方の李織も首を傾げている。

自分が言った言葉の意味を頭で考え、京二郎は激しく狼狽した。

「いやっ、今のは忘れて！　ほら、色々と面倒な事になるじゃん？　なんていうか、世界の危機的な」

興奮故の過ち、とでも言うのだろうか、京二郎はそう続けて言い、助けてくれた恩人にヘラヘラと締まりの無い笑顔を見せる。依然として二人は、愛想笑いと訝しげな表情を浮かべていた。

「それよりー、このブッ飛び女はなんなのでしょうか？　いやね、兄弟って事は分かったよ。あんた達が一卵性の双子だって事も、地味に大家族だって事も分かるさ。けど、コイツの異常性だけ分からない。何、この異常性」

まくし立てるような京二郎に、阿雲は困ったように頭を掻き、優しげな瞳をブッ飛び少女――月絵に向けた。

「昔からちょっと変わった子でしてね。根は優しいんです。許してはいただけないでしょうか？」

彼の言葉に、京二郎を目を見開く。ピクピクと頬は震え、乾いた笑いを浮かべた。

「ちょっと、ね。あはは、根は優しい、ね。そうかそうか。死のうとした挙げ句、俺を殺そうとした狂人が『ちょっと変わった根は優しい子』かぁ……」

徐々に不穏な空気が全身から出てくる。阿雲は笑みはそのままで、冷や汗を流し、彼の弟の李織は「ヤバいくね？」と阿雲に言っていた。

「あ、あの、落ち着き――」

「ああ、俺もそう言った！　だけどあの狂人は人の話を聞かない！　そもそもどういう経緯で俺を殺そうとするのか、理解出来ない！　このままじゃあ、許されないよこれは！」

もしここに外道丸がいたなら、京二郎の真意を理解して加勢しただろう。そう、京二郎の真意とはこの状況を利用して目の前の奴等から搾れるモノを搾り取ろうというものだ。

ちなみに、思い付いたのは阿雲が月絵に優しげな視線を向けた頃。やっと状況の把握も追い付き、頭もそこそこ冷静さが戻った頃合いに、京二郎はこんな思惑を巡らせていた。演技力には自信がある。

その時、おもむろに李織が鋭い目を月絵に向け、兄の阿雲に言葉をかけた。

「そろそろ連れてかないとヤバいんじゃねえの？　これ以上の問題は兄貴にどやされるぜ」

「そうだね。僕も兄さんに怒られるのは本意じゃないし……」

兄弟のやり取りを聞き、京二郎は首を横に振った。

「まあ、そういう事なら仕方ない。とりあえず、あんた達のクラスを教えてくれないかな？」

……意外と素直である。この場にファイが居たなら、何を企んでいるのだ、と勘繰るであろうが、不幸な事にファイは居ない。更に言うなら、ここの兄弟は京二郎を知らないであろう。

自分達の危機に気付かない阿雲は頭を下げ、口を開いた。

「ありがとうございます。僕のクラスは2―5です。失礼ですが、貴方のクラスと名前を教えていただけますか？」

心の中で冷笑を浮かべながら、表面上ではにこやかに返事をする。

「倉野京二郎、3―5で……」

その瞬間、李織は青ざめながら兄の手を握り、月絵の元へ引っ張っていく。素早い動きで月絵を担ぎ、阿雲に何かを叫びながら走り去っていった。

……瞬く間であった。

◇◇◇

走り走り、魔術まで使ってあの場から逃れた、月絵を背負った李織と阿雲は校舎の中に入っていた。多数の生徒達が歩く中で、二人

は肩で息をしている。

「はぁ、はぁ……李織、どうしたんだよ？　周りの視線が痛いよ」

阿雲の問いに、李織は周りを見渡しながら息を整え、口を開く。ちなみに、彼らを見ている生徒達の視線は冷たいものだ。

「阿雲……俺達はとんでもない先輩と関わっちまった」

「倉野先輩の事かい？」

阿雲は先ほどまで話していた先輩の事を思いだし、首を傾げる。少し変わった人だとは思うが、李織が真っ青になる程の人物だとは思わない。

「知らないのかよ……あの人の噂」

「噂？　あの人は有名人なのかい？」

「ああ、有名人も有名人さ。なんたってあの先輩――」

俯き気味で話し始める李織だが、その言葉は剣呑な声により遮られる。

「おいお前達、何をしている？」

その声に、阿雲と李織は周りを見た。すると、一人の見覚えがある生徒を見つける。

「ヤン……先輩……？」

そこにいたのは、冷たい瞳が印象的な少年であった。黄色系の肌、知的な雰囲気を醸し出す顔立ち、冷徹とも言える黒い瞳は深く、闇が落ちている。

ヤンと呼ばれた男子生徒は、冷たい表情で戸惑っている二人に話しかけた。

「お前達は何をしている？」

「い、いや、これは……」

慌てて言い訳を探す李織だが、中々浮かばない。すかさず阿雲がフォローに入った。

「ヤン先輩は、か弱い女子生徒を誘拐染みた事をしていると勘違いしているのですよね？　しかし、それは違います。この女子生徒は僕達の妹で、息が少し切れているのは、ある先輩から逃げてきたからです」

「ほう、その先輩とは？」

「倉野先輩。倉野京二郎という先輩ですよ、ヤン先輩」

「倉野……京二郎……？　奴が……奴がまた何かやらかしたのか！？」

突然怒鳴り出したヤンに、阿雲は驚いた。阿雲とヤンは以前から

知り合いで、こんな声を出す人物ではない、という事を知っている。一体何だ、と一人首を傾げると、冷徹な瞳はどこへやら、血走った目で阿雲の肩を掴んできた。

「奴は何を――」

言ってる途中に、ヤンは意識を失っている生徒――月絵に視線を移した。

「まさか、倉野が……？」

顔を手で覆い、表情を歪める。

「いや、それは倉野先輩ではなく――」

「クソっ！　長い間大人しくしていると思ったが……本性を現したな……！」

人の話しなど聞いていなかった。阿雲は苦笑いを浮かべ、李織は肩をすくめる。見る限り、止めようが無い。

「その子を医務室に連れていけ。私はこの事を委員長に報告する」

そう言うと、どこかへ駆けていった。まるで一瞬の出来事である。

呆然としたまま、阿雲は李織に疑問をぶつけた。

「さっきの続き、聞かせてくれるかい？」

「ああ。あの先輩は――風紀委員の天敵なんだよ」

第二話三切　企みと気付きについて（後書き）

分かる方にも分からない超マイナー過ぎるマニアックなネタを入れました。

分かる人はいるかな？

第二話四切　逃げ出す鬼、断末魔と外道

◇◇◇

昼休みの間になんやかんやあったが、何とか教室までたどり着いた京二郎は、目の前に広がるカオスに呆然とした。

「キャー！　外道丸くーん！」

「はぁ……美しい。完成された美は私の心を鷲掴みにする。それはまさに――」

「ＯＨ、ゲドウマル。Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ……」

二人ほどおかしな人物が混じっている。しかも、最後の人物は肌が黒い。どこの国出身であるか。

まあ、状況は実に単純であった。外道丸という美少年に、女子達が色めき立っている。

それに対して外道丸は、表情を崩す事なく一人一人対応していた。

「一人目の方、うるさいです。少し黙って下さい。二人目の方は自重して下さい、ドン引きです。三人目、お前誰だよ」

京二郎は、的確な対応に感心しながらも、教室の奥に目を向ける。外道丸達がいるのは入り口から手前。奥には男子生徒が固まっていた。

「ラブコメじゃね？　あれ、作者が嫌いなタイプのラブコメじゃね？」

「僕ね、今なら世界のルールを無視して、あのイケメンを殺害出来るよ」

「ゲドウマル、コロス」

こちらも混沌としていた。いや、女子以上にグダグダである。思わず、京二郎はツッコミを入れてしまった。

「作者とか身もふたも無い事を言うなァァァァ！　二人目の奴はもう無視の方向で！　っていうか、三人目、お前誰だァァァァ！」

三人目、こちらも女子と同じく肌が黒く髪がチリチリとしていた。なぜかサングラスをかけ、タンクトップを着ている。

色々な意味でカオスな教室が収まったのは、ある教師の出現からであった。

「倉野京二郎！　外道丸！　ちょっと来てもらおうか！」

聞いた事のあるハスキーな声に、京二郎は自分が入ってきた入り口とは反対側の入り口を見る。そこには、スーツを着た妙齢の美女がいた。

「あ、Φ先生」

「えぇぇぇぇ！？　何でそんなツッコミ所が多すぎてツッコミづらいボケをすんの！？　ファイって入力したらこんなのが出てきたよ

ー、あははー、みたいなノリだよね、それ！？」

「あー、意味も分からないみたい」

「みたい、って誰がだよ！」

「ほら、アレだよ。アレ的なアレ。アレを作ってる頭がアレなあの人だよ」

「もう疲れたわ！」

京二郎はファイが来た途端、水を得た魚のようにボケを繰り出した。もう立ち位置、役割が確立しているのは言うまでもない。

「とりあえず、倉野と外道丸は今すぐ来い」

気を取り直して、という風に言ったファイに、京二郎は顔をしかめる。

（バレたか……？　いや、それにしても早すぎる。仮にバレたと仮定しても、このタイミングで呼び出し？　ファイ先生なら復讐の為に色々と準備をするはずだ。しかも得意気な憎たらしい顔で）

ファイが自分を呼び出す理由について推理する。実は京二郎と外道丸がした事はもうバレているのだが、京二郎がその事について知っているはずもない。

罠を仕掛けられている可能性も視野に入れ、京二郎は外道丸に目配せをする。すると、目配せされた外道丸は心得たとばかりに頷き、ファイを見た。

「ファイ先生。相変わらずお美しい。今日は何の用ですか？　つまらない用事なら、アノ事を言いふらしますよ」

外道丸も警戒しながら、無表情で言った。何が待っているか分からない今は、とりあえず相手の弱みにつけこむ。外道丸らしいやり方であった。

すると、意外にもファイは表情を変える事なく、つまらなさそうな顔で返事をする。

「アタシが綺麗なのは当たり前だ。つまらない用事じゃないから、早く来い」

瞬間、京二郎の脳内に危険信号が灯った。ヤバい、このまま行けば何かとてつもない事が待っている。

「外道丸！　ヤバい、逃げるぞ！」

「賛成です！」

外道丸は素早い動きで京二郎のいる入り口に向かい、京二郎は振り替えって逃げようとする。しかし、大きな何かに阻まれ、それは叶わない。

大きな何かとは、人であった。京二郎よりも遥かに高い身長はおそらく二メートルに近く、厳めしい顔付きに鋭い瞳を持っている。白系の肌を健康的に焼いたような肌色をしており、髪は赤く短い。かなり特徴的な人物である。

そして、京二郎は彼が誰かを知っていた。

「あららー、風紀委員のコーク君、御機嫌麗しゅう。」
引きつった笑顔で言う京二郎に、コークは重そうな口を開いた。
「ファイ先生の呼び出しは応じろ」
「あのね、コーク君。人は流されるままに生きていても――」
「ルールは絶対。教師が呼び出せば応じる。これもルールだ。それを破るなら、風紀委員が粛正する」
「物騒だねー、頭が堅いって良く言われない？」
「む、確かに私は石頭だが……」
「先生ー、会話がどうしてもズレてしまいます」
どうしようもなくグダグダな会話に、ファイはため息をつき、コークに命令を出す。
「倉野と外道丸をただちに確保してくれ」
「了解であります」
すると、京二郎は何故か驚いた顔をし、ファイを指差し叫んだ。
「ファイ先生が……まともに教師してるぅぅぅぅぅ！？」
「ブッ殺すぞダメ犬がァァァァ！　コーク、デッドオアアライブだ

！」

とうとうぶちギレた独身教師（２８）が素直な生徒に犯罪の手引きをしていた。と、京二郎は心の中で呟く。口に出さないのは、そんな余裕が無いからだ。まあ、そんな状況で、心の中で呟いている京二郎は間違いなく人格が破綻している。

ともあれ、敬愛する教師の命を受けたコークは、京二郎の頭を鷲掴みにし、握り潰さんかぎりの握力を発揮した。

「いたたたた！　割れるぅぅぅぅぅ！　僕の優秀なミソがぶちまけられるぅぅぅぅぅ！」

本格的に危険の域に達している京二郎を見て、外道丸がため息をつきながら動き出した。

「世話のかかるご主人ですね……」

「ゲドウマルゥゥゥ！」

「とりあえずお前はうるさいです」

イカれた何人かをスルーし、外道丸は更に京二郎とコークまでスルーし、教室から出ていった。ちなみに、コークは京二郎に手が一杯である。

「おいィィィィ！　スルーしないでェェェェ！」

「我が身大切さにご主人を売る私の罪を許して下さい」

「だからスルーしないでェェェェ！」

外道丸は京二郎を餌に逃げる逃げる。全力疾走で廊下を走り去り、突き当たりを曲がり見えなくなった。

「え、嘘！？　冗談だよねぇぇぇぇ！？　ジャパニーズジョークだよねェェェェ！？」

虚しく響く京二郎の声は廊下と教室の喧騒に消えた。残された京二郎はただただ、コークに頭を締め上げられるだけ。ニヤニヤしているファイがとてつもなく腹が立つ。

この時にはもう、京二郎はファイの奇妙な態度の理由が分かっていた。それはまた、とてつもなく腹の立つ理由。京二郎の専売特許とも言える、相手を嵌めて騙す行為……

一言で片付ければ、演技である。

必要以上の警戒心を持たれない為の演技。その演技に、京二郎と外道丸はまんまと嵌まった。

恨みのこもった視線をファイに向けると、彼女は憎たらしい笑顔をしていた。

「どうだ……ご主人様、この浅ましい奴隷を助けて下さい、そう涙ながらに言いながらアタシの靴を舐めれば許してやらん事も無いぞ」

「死に、腐れ……クソアマ」

「コーク、貴様の力はそんなものか」

「フンッ！」

ファイの言葉に、コークは更に更に力を入れて握り潰す。生々しく、吐き気のする感覚と激しい痛みに、そろそろ命の危険を感じながら、京二郎は絶叫した。

「ギャアァァァァァ！」

その声はまるで汚ならしい断末魔であったそうな。

第二話四切　逃げ出す鬼、断末魔と外道（後書き）

あれ、長くね？　軽く２０００文字いってるし……前に言った１００文字前後って宣言は？　と思われている方があるなら、申し訳ございません。

少し理由がありまして、こんなにも長いです。ストックしている分を見直すと、これまたそこそこに長い。

まあ、普通に考えれば一部分１０００文字なんて滅茶苦茶短いんですけどねぇ。

第二話後切　出会い、それは未来へと繋がる（前書き）

後書きにフライング的なネタバレ有り。
先に謝っておきます、ごめんなさい。

第二話後切　出会い、それは未来へと繋がる

◇◇◇

ふぅ、と息を吐く。木製のベンチに腰を下ろし、外道丸はこれからどうしようか、考える。ノリで逃げたは良いが、結局は捕まるだろうと、外道丸はげんなりとした。

ここは学校であり、相手は教師だ。帰ろうにも京二郎がいなければどうにもならないわけで、まさに八方塞がり。だけど呼び出しに応じればどんな目に合うか分かったものではない。京二郎を助けるのも癪にさわる。

外道丸という使い魔は面倒臭い性格をしていた。

ちゃっかり、周りを見渡せる場所にいるから、質が悪い。ここは学校の中庭で、自然が溢れ爽やかな空気が流れているのだが、生徒からの人気はいまいちだ。何を好き好んで休みの度に外に出なくてはいけない、というのが生徒の声。今時の若者は室内が好きなのだ。

と、そこで外道丸は人の気配を感じた。即座に警戒し、周りを見渡す。すると、向こうの方で数人の男女がいた。女子生徒が縄を木にかけており、男子生徒二人がそれを止めようとしている。

何やら面白そうな事をしていた。胸の中にある好奇心がみるみる内に膨らんでいく。野次馬根性丸出しであった。

ここら辺は京二郎とは似て非なる性格。京二郎はどこか人生を舐めており、危険だと分かっていても分からないフリをして要らぬち

ょっかいを出したがる。対して外道丸は自分の心に正直で、興味のある事は危険だと感じずに突っ込んでいく。

要は、感性の違いであった。

いつもの無感情な瞳は僅かにキラキラと輝き、外道丸はベンチを立つ。そのまま三人に近づいていき、途中から聞こえてきた言葉に思わず立ち止まった。

「だから、倉野先輩には関わっちゃいけないの！　あー、縄から手を離せ！　鬱になるな！　面倒くさ……あー、ゴメンゴメン。だからそんな表情しちゃだめ！」

状況が良く分からない。だけど、倉野先輩という言葉は外道丸を立ち止まらせるには充分な言葉である。また、京二郎絡みだ。どこまでトラブルを引き起こせば気が済むのだろう。いや、彼自身がもうトラブルの化身である。

ともかく、外道丸は主人の憎たらしい笑みを思いだし、ため息をついた。この三人組も京二郎が何かをやらかし、被害を受けた可哀想な方達なのであろう。

再び足を動かし、三人組に近づいた外道丸は、とりあえず眼鏡をかけた男子生徒に話しかける事にした。もう一人は説得に忙しそうだ。

「すみません、貴方達はどこのお笑い芸人ですか？　正直、センスが無いので辞める事をオススメします」

この男はまともなしゃべり方が出来ないのか。まるで社会に順応

出来ない偏屈人間である。

そんなダメ使い魔の頭がおかしいとしか思えないコンタクトに、眼鏡の生徒は不思議そうな顔をして、返事をした。

「え……と、どこかでお会いしましたか？」

そりゃそうだ。あんな第一声を放つ初対面など、存在するはずがない。まあ、実際は目の前にいるのだが、眼鏡の生徒は申し訳無さそうな表情をした。

が、外道丸の本質はあくまでも変人である。普通の返事をするはずが無かった。

「まずその丁寧な話し方を即刻止めて下さい。被ってるんですよ。読者が混乱する危険がありますから、貴方は丁寧な話し方をする眼鏡から、ただの眼鏡になってください」

誰が間違いか。そう天から聞こえてきたような気がした外道丸は怪訝な表情をするが、そこは電波という事で気にしない。

一方、ただの眼鏡になれと言われた男子生徒は、困ったように笑みを作る。

「すみません、この話し方は癖でして。家族以外にはこの話し方なんです。あと、これはだて眼鏡です」

「な……！」

外道丸は眼鏡の発言に衝撃を受けた。

（だて眼鏡……？　そんな馬鹿な！　地の文でさえ眼鏡と称しているのに、だて眼鏡……！？　こいつは強敵ですね）

何やらブッ飛び過ぎて世界からはみ出した思考をする外道丸は、目の前の眼鏡を強敵と認識する。自分のキャラを薄れさせる恐れがある相手だと、警戒した。

「ああ、ね。だて眼鏡ですか。俺も持ってますよ、だて眼鏡。今日はかけてないだけですから。いつもはかけてますから。地の文もだて眼鏡って言ってますから」

意味の分からない反論をする外道丸。もはや正常な思考を持つ者にはついていけない。ツッコミがいないから、この変態の処理が追い付かない。

あいにく、眼鏡はツッコミの出来るクールなキャラでも、陽気なキャラでもない。

「へぇ、まあ、良いんじゃないですか。地の文が眼鏡だろうと、だて眼鏡だろうと、僕は気にしませんから。っていうか、既になってますよね、これ」

にこやかに言う眼鏡。意外や意外、彼も世界からはみ出した思考回路の持ち主であったらしい。地の文という単語が何よりの証拠だ。

（ま、まずいですね……。話を切り換えないと、この話題で勝てる気がしません。というか、話が進みません）

何を基準に勝敗を決めるのかは分からないが、外道丸にしてはまともな事を思い、行動に移した。

「ま、まあ、それにしても楽しそうな事をしていますね。コントの練習ですか？」

ちなみに、この世界にはお笑いもコントも存在する。笑いが無ければ世界はままならない。笑いは世界を現在進行形で救っているのである。

「いや、コントじゃないです」

なぜか適当に返された返事に外道丸はピクッときてしまうが、そこは抑える。礼儀を忘れてしまえば、この複雑な社会を生き抜いていけない。などと、礼儀という言葉をどこで覚えた、と言いたくなるような事を思った外道丸は、気を取り直して再び尋ねる。

「何をしているのですか？　五秒以内に答えないと磨り潰しますから。……一、二、五。はい時間切れー。磨り潰し決定ー」

「冷静に最初から順にツッコミますと、なぜ磨り潰し？　っていうかどこを？　言い知れない恐怖がありますから。それと、なんですか、その面倒だから一気に飛ばしてしまおう、みたいなカウントは。三と四はどこに行ったんですか？」

……なんとも、下手くそ過ぎて笑いも出ないツッコミをありがとう。この男子生徒は、ツッコミも出来ない丁寧な眼鏡らしい。そして、やはり肝心な事を忘れている。

「ねえ、ここまで来るとわざとですよね。逆にわざとじゃないと悲

しいんですけど。人の話を聞かないボケ殺しは嫌われますよ」

「ええ、わざとです。良かったですね。ちなみに、理由は身内の恥を晒したくなかったからです」

「もう充分に晒してるよ」

いつもの丁寧な言葉を止め、思わずツッコミを入れてしまう外道丸。

ははは、と笑った眼鏡はなぜかいきなり頭を下げ始めた。それにはさすがの外道丸も驚き僅かに表情を歪める。

「何のつもりですか？」

「非礼のお詫びです。今、少し取り込んでいますので」

外道丸は、眼鏡の言わん事を理解する。取り込んでいるから、自分の相手をしている暇は無い。だから、とっとと目の前から消え失せろ糞虫が。

多少、外道丸の脚色も入ってはいるが、意味は同じだ。実際、他の二人を見ると中々に愉快な事態に発展している。

縄を持つ霊的なオーラの漂う女子生徒が、首を吊る事を諦めて、とうとう縄で自分の首を締める、という暴挙に出ていた。もう一人の男子生徒は、なぜかそこから一歩も動かない。しきりに、眼鏡に向けて兄貴と叫んでいるのを見ると、眼鏡は彼の兄らしい。

第三者の視点で、あらためて見てみると、この状況はあまりにカオスだ。自殺しようとする霊的な少女、それを止めようとするが動かない男子生徒に、着物を着た美少年に頭を下げる眼鏡。そして、それを愉快だと言って観察する自分がいる、となればもう誰が見てもこいつらとは関わりたくない。

しかし、当事者で無い事は楽しいな、と考える外道丸に眼鏡はしびれを切らしたのか頭を上げて、話し始めた。

「仕方ありませんね。事情をお話します」

外道丸は何も言っていないねだが、言っていないからこそ勘違いした眼鏡は、少女を取り抑えながら話を続けた。

「この自殺しようとする少女は僕の妹で、月絵と言います。そこで喚いているのが弟の李織。そして、僕は阿雲と申します。今は、見ての通り月絵を自殺させまいと押さえている最中です」

簡潔に説明され、外道丸は状況を把握した。どこで京二郎と繋がるかは不明だが、状況だけは分かる。

成る程、そう頷いた京二郎は踵を返して立ち去ろうとする。しかし、それを眼鏡が焦りながら止めた。

「ちょ、ちょっと！　ここは普通助けないですか！？　人として助けないですか！？」

ごもっとも。人間らしく、道徳的な正論であった。

が、あいにくと外道丸は道徳的な人間ではないし、そもそも人間

ですらない。興味を失ったようないつもの無表情で、外道丸は言う。

「いや、思ったよりも面白く無いです。だから、立ち去ろうとしただけ。それに、俺は人間じゃありません」

その言葉に、眼鏡は驚きながらも、切羽詰まった声で言ってしまう。そう、言ってしまった。

「お礼はしますから！」

過去は変えられない。言ってしまったものは仕方ない。それによってどんな未来が待っていようと、過去は変えられないのだ。

眼鏡の言葉を聞いた外道丸は、妖しい笑みを浮かべる。

「嘘、ではないですね？」

「もちろん！」

「良いでしょう。助けます」

すると、外道丸は目の前の何も無い空間から棘の付いた半身程もある大きな金棒を取り出した。黒い光を放つ金棒は、何も無い空間から出現したのだ。

手に持った外道丸は、金棒を振りかぶる。

「え……？」

眼鏡は突然の事に声を発するが、もう遅い。

「ふんっ！」

気合いと共に外道丸は金棒を、月絵にブチ当てた。ちなみに、場所は頭である。

月絵は回転しながら、木へとぶつかった。白目を向き、見事に気絶している。

そんな彼女の様子に、外道丸は満足げに頷いた。

「よし」

「どこが『よし』じゃァァァァァ！　あれもうシャレにならなくね？　結構危ない領域行っちゃってると思うんだけど！？　っていうか、あんた誰だよ！」

今まで外道丸のノータッチだった李織が声を荒げた。動作無しの叫びというのは、気持ちが悪い。

そして、李織の言葉に外道丸は涼しげな表情で口を開く。

「俺は一応、倉野京二郎の使い魔をしている外道丸です。……以後、お見知りおきを」

何気ない昼下がりの場面。それが、後に繋がりを見せ、とんでもない事件へと発展する。

しかし――それはまだ先過ぎる未来の話。

第二話後切　出会い、それは未来へと繋がる（後書き）

二話が終わりました。あ、ちなみに必ずしも一話五部構成ってわけじゃありません。

はい、二話で魔術の説明をしようとして失敗した作者です。三話には必ず出します。

この話、というか二話で色々と言いたい読者もいると思いますが、そこは許して下さい。

一応、言い訳として異世界英雄伝説には大筋のストーリーが存在します。更に言っちゃうと、かなりの長編になる予定。どうしましょ。

あ、それとキャラに対してのツッコミも、もう少しだけ待ってください。色々と伏線有りますし、あの兄弟は重要な役割がありますから。

次は第三話です。

第三話一切　三十路独身彼氏募集中

複数の視線。そのどれもが敵意の感情がこもっている。いくつか例外があるのだが、そこは気にしない。

京二郎はささくれた心境で、周りを見渡した。複数の机と椅子が奥に山積みになっており、部屋の中心に自分はいる。周りには十人程の生徒が囲んでおり、出入口を確認するが出られそうもない。

はぁ、と諦めたようなため息をつき、口を開く。相手は目の前にいる教師だ。眼鏡をかけ、黒いスーツを着こなしている美人さん。

「ファイ先生さー、俺を捕まえてどうするつもり？　いくら俺が好きだからって、過激過ぎないかい？」

その言葉に、ファイは鼻で笑う。馬鹿にしたような瞳は、周りの生徒とは違った。

「黙れ。今の状況が分からない程、お前も馬鹿ではないだろうが」

「ほぅ、先生が俺を評価してくれるのかい？」

「……悔しいが、倉野京二郎、お前は非常に優秀な能力を持っている。惜しむらくは人格だがな」

「能力、ねえ。先生の好きな戦闘は平均以下の成績だけどね」

「でも、ズル賢いだろう？　卓越した、人を騙す才能と人を嵌める技術は評価に値する。その頭脳を正しい事に使おうと思わなかった

のか？」

いつもの態度とは明らかに違うファイに、京二郎は冷や汗を流した。

（おそらく、ファイ先生の事だから弱点は消してある。弱味はもう通用しない、と考えても良い。更に、俺を相手にするという事は準備も万端。危機的状況……）

頭の中で逃げる計画を立てていくが、どこかで挫折する。会話をした数秒だけで三つの作戦を考えたのだが、そのどれもが問題点を抱えているものばかりだ。

まずい。非常にまずい。このままではファイの思い通りになる。それは、京二郎のちっぽけ過ぎるプライドが許さなかった。

「退学にでもするか？」

それでも反撃の糸口は見つからない。ああ、最低の使い魔を恨む。あの時、彼が見捨てなければ自分はこんな場所にいなかったかもしれないのだ。

しかし、今はそんな事を考えている暇は無かった。一秒でも早く脱出の糸口だけでも見つけなければ。だから少しでも会話を引き延ばし、アクションを起こさせないようにする。

京二郎の問いに、ファイはニヤニヤとしながら答えた。

「言ったろう、能力だけは評価していると。退学にはしないさ。しない、代わりにお前には改心してもらう」

「善良な生徒に対して改心とは、頭でもイカれたかな？　三十路独身彼氏募集中のファイ先生」

「だらァァァァァ！　おんどりゃヤァァァ！　ブチ殺しちゃるゥゥゥゥ！」

キャラが崩壊するくらいの怒りっぷりだ。それもそうで、京二郎が言った『三十路』『独身』『彼氏』というのは、ファイに対しては危険なワード。余裕綽々のファイに、単体では効果が無いと判断した京二郎は合わせて使ってみたのだが、効果はてきめんだったようだ。

「落ち着いて！　一先ず落ち着け！」

「うるさい！　このゲスはこの手で殺す！」

「教師の吐くセリフじゃねえよ！」

暴走モード突入！　そんな状態のファイを、一人の男子生徒が押さえていた。褐色の肌、短い黒髪に鷹のように鋭い目付きが目立つ生徒。服の上からでも分かるくらいに筋肉質な体は、見るからに鍛え込まれている。

暴れる教師を押さえる生徒。学校の未来が危ぶまれる光景を見ながら、京二郎はゲラゲラと笑った。

「コロス！　コイツはコロス！　ハナセェェェェ！」

「おぉぉぉぉい！　目が危ないから！　瞳孔開いてるから！　お前

らも見てないで押さえろ！」

そこで、周りの生徒はハッとしながらファイを押さえる。ただ一人を除いては。

その生徒は闇が落ちたような黒い瞳で京二郎を冷たく見やり、低い声を発した。

「倉野京二郎。貴様は様々な悪行を繰り返してきた。今までは寛大な心で許してきたが、もう黙ってはいられない」

「誰が寛大な心ですか？　今まで追い回された俺の気持ちを考えてください」

「しかし！　貴様は今日、許されない行為をした！」

「ねえ、人の話聞いてる？」

「何の罪も無いか弱き女子生徒を襲い、それでも飽きたらず教師にまで危害を加えた！　許される事ではない！」

「誰かァァァァ！　話の通じる奴を用意してくださぁぁぁぁい！　会話のキャッチボールが出来ません！」

人の話を聞かない見かけによらず熱血男子は、更にヒートアップしていく。自分の世界に入り、暴走するファイでさえ無視ときた。

「私達は生徒会の剣だ！　ルールを守り、弱きを守り、生徒達の盾となるべき存在！　しかし、時には非情な心でルールを破る輩を粛清する剣となる！　今、貴様に正義の刃を突き立ててやる！」

ここまでくるとドン引きである。

「剣は良いけど、人の話を聞こうね？」

京二郎も、かなり引きながらも何とか言葉を発する。が、ここで気になる事があった。

周りを見渡し、首を傾げる。

「あれ、部長さんは？」

「部長ではない！　委員長だ！」

何故か冷たい熱血男子が訂正した。何故、部長ではなく委員長にこだわる。

京二郎が言った部長とは、生徒会執行部またの名を風紀委員のトップにいる存在である。この場には、そのトップがいない。

「その問いにはアタシが答えてやろう」

「……正気に戻ったか」

突然会話に乱入してきたファイに、心底嫌そうな顔をしながら言う。しかし、ファイは気にしないように話を始めた。

「クルスを含む数名の生徒は、外道丸の確保に出ている。捕まるのも時間の問題だな」

悪役のような笑みを浮かべて言うファイに、京二郎は呆れた非情をしながら口を開いた。
「ファイ先生、アンタは勘違いしてるよ」
「ほう、外道丸が助けに来るとでも？」
ファイの返しに、京二郎は首を横に振る。
「違う。分かってない。外道丸は放っておいても大丈夫という事さ」
「聞き捨てならないな、その言葉」
「それで良い。外道丸は使い魔って事を忘れないように。アイツは何も出来ない。ここでは、誰かに頼らなければ何も出来ない存在なんだ。今の所、それが俺って事さ。つまり、外道丸は俺がいなきゃ何も出来ない」
京二郎は話している間にも、目を細める。集中し、心中で何かを呟いた。だけど、その間にも口をスラスラと動く。
「だからさ、ファイ先生、外道丸に関しては心配無いよ。神に誓って、奴はここに来る」
「良く動く口だな。縫い合わせたくなってきた。神も信じないお前の戯れ言など聞いていられないなぁ。美しい主人と使い魔の友情物語はここで終了だ。茶番は終わりにして、本題に入ろうじゃないか」
カツカツと京二郎に歩み寄り、顔を近付ける。理知的で整った顔が目の前にあるというのに、京二郎は笑っていた。不敵で、ふてぶてしい笑い。

「良いよ。本題に入ろう。でもファイ先生、ここで質問があるんだけど」

「……言ってみろ」

「使い魔と主人の関係とは？　繋がり、契約の詳細は何？」

その質問に、ファイは怪訝な表情をした。

「何故、そんな事を聞く？」

警戒するファイは、出来るだけ表情を少なくし、口数や口調も淡々としたモノに変わっていた。

聞き返してきた彼女に、京二郎は肩を竦める。不敵な笑みは消えていない。

「別に、答えたく無いなら答えなくて良いよ」

数秒間が空いた。おそらく、答えて良いモノかどうかを考えているのだろう。そう予想し、京二郎は心の中でほくそ笑む。

（もう関係無い。もうすぐ着くかな？）

心中で呟き、ファイを見た。答えが出たのか、彼女は憮然とした表情で話し始める。

「使い魔とは、人が呼び出し使役する生物の総称。魔術を覚える上で使い魔は必ず必要となり、優秀な魔術師であるほど、優秀な使い

魔が召喚される。使い魔と魔術師は契約により主従が確定する。契約方法は様々で、時には戦闘になる場合もあり、契約には危険も伴う。……これで良いのか？」

感情を殺して淡々と話したファイに、京二郎はパチパチと手を叩いた。

「教科書みたいなガチガチの回答ありがとう。だけどファイ先生、アンタは忘れてる。俺は聞いたはずだよ、使い魔と主人の繋がり、って」

その言葉を聞いたファイは、何かを考える仕草をし、突然叫び始めた。何かに気付き、焦った表情で。

「コウア！　入り口を固めろ！　誰も中に入れるな！」

コウアと呼ばれた、先程ファイを押さえていた褐色の男子生徒は、戸惑いながらも入り口に近付く。

「一体なんなんだよ……情緒不安定過ぎるだろ……突然叫び出すし暴れるし、あれ本当に教師……？」

と、ファイを貶すような言葉をグチグチと呟きながら入り口に近づき、ため息を吐く。すると、ドアの向こうに誰かがいると気付いたコウアは、自分達のボスが帰ってきたのかと思いドアを開けた。

……ファイから言われた注意も無視して。

ファイはドアの向こう見る。そこには、見覚えのある数人の生徒とこの場にいる問題児の使い魔で――

「先生、使い魔と主人は繋がってるのさ。魔力って絆でね。やろうと思えば、相手がどこにいるかも分かるし、何より声を出さずに距離が離れていても会話が出来るんだ。……勉強になったかい？　ファイ先生ぇ」

ファイは悔しげな表情をし、今までの反省をする。京二郎が取った行動の一つ一つに意味があった。それに注意しなかった自分を恥じる。

京二郎はそんな様子のファイを見ながら、呆然としたまま外道丸を見ている周りの生徒達に対して高らかに叫んだ。

「無能共！　良く聞け！　風紀委員か何かは知らんが、こちらには生徒会がついている！　もう一度言うぞ、生徒会は俺達に味方だ！　ヒャハハハハ！」

汚ならしい、小物丸出しの悪役な笑い声は、廊下にまで響き渡った。

第三話一切　三十路独身彼氏募集中（後書き）

ご都合主義万歳な回でした。
ちなみに、ここでも超マイナーなマニアックネタを使っています。
分かる人がいたら嬉しいな。

第三話二切　ケータイデンワ（前書き）

更新遅れます。理由は後書きにて。

第三話二切　ケータイデンワ

◇◇◇

外道丸は意識を集中し、自分の中にある『魔力』を脳に集める。すると突然、声が聞こえてきた。焦ったような、酷く慌てた声が。

『外道丸ぅぅぅ！　助けて下さぁぁぁぁい！』

その声は、紛れもなく京二郎のモノであった。外道丸と京二郎は契約により主従関係が成り立っている。それにより二人を繋ぐパイプのようなモノが出来上がり、魔力によって会話が出来るのだ。

魔力とは体内にあるエネルギー。詳しくはまだ解明されていないが、体力のようなものらしい。使えば減り、休めば回復する。

しかし、魔力は体力と違い鍛えられない。鍛える方法はあるかもしれないが、一般的には不変のものとして知られていた。生物に流れる魔力は共通らしい。

魔力を使って何が出来るのだ。答えは、魔術や魔法が使える。魔術とは物理現象を少し弄くり、魔法は現象を造り出す力だ。

例えば、魔術ならそこにある火を更に燃え上がらせる事が可能で、魔法は何も無い場所から火を造り出す事が出来る。便利さで言えば魔法の方が圧倒的だ。

だが、人類皆平等というわけではなく、魔法を使える者と使えない者がいる。つまり、魔法は持って生まれた才能というわけだ。更

に言えば、人間が使える魔法は一種類だが、それ以外が使える魔法は様々ある。

悲しい事に、魔法は努力もなしに使える。複雑な公式や術式などを覚える必要はなく、炎よ出でよ！　と思うだけで炎が出るのだから、必死に努力している者を冒涜するような力だ。

外道丸と京二郎が使っているのは魔法ではなく魔術に分類される。魔力との繋がりがパイプとなり、一度そこに魔力を流せば言葉も出さず、離れていても会話が出来る仕組みとなっていた。

世間ではこの魔術をケータイと呼ぶ。何か間違っている気がしないでもないネーミングだが、外道丸が分かるはずもなく、何の疑問も無しにケータイを使っていた。

京二郎は相も変わらず何かを叫んでいる。ケータイで京二郎と繋げている間にも魔力は消費していくわけで、無駄話をしている時間は無い。そろそろ面倒なので切りたいなと思っている外道丸は、京二郎に自分の考えている事を話した。

「ウザいです。ミジンコ辺りに転生してくれませんか」

「それ、死ねって事だよね！？　しかもミジンコって何だよ！　世界観が崩れるわ！　いいから助けろよォォォォ！」

「下手なツッコミありがとうございます。……まあ、助けてあげますよ。仕方無しにですけどね。自分の為ですから。ご主人の為じゃ無いですから」

「ツンデレェェェェ！」

そろそろおかしなテンションになっている京二郎に、外道丸は自分の計画を話し始めた。

「まず、時間を稼いで下さい。貴方に求めるのはそれだけです。後は俺がなんとかしますから」

「んー、勝算は？」

「絶対ですね。なんせ、ご都合主義で成り立ってますから、この世界。補正が働いていますから」

「あれ、また危ない発言したよね？　で、そのご都合主義ってのは？」

「……生徒会を味方につけました」

ニヤリと笑い、外道丸が言うと、京二郎はゲラゲラと笑い始めた。おそらく、声にも出して笑っているのだろう。

実はこの時、ファイが暴走モードに突入しているのだが、外道丸が知る由は無い。年中、覚醒モードにいる人間を主人に持っているのだから、知っていても大して驚きはしないだろうが。

外道丸は事の顛末を話し、一度ケータイを切る。脳の異物が取れたような爽快感が走り、息を吐いた。

そして、目の前にいる人物に声をかける。眼鏡キャラが確定した、双子の兄――阿雲に。

「ご主人には借りがあるんですね？　そして、俺にも恩がある。先

ほど話した通り、ご主人は今危機的な状況にいます。そして貴方達は助ける事が出来る。ご主人を助ければ俺は嬉しい。貴方達も借りと恩を同時に返す事が出来ます。みんなハッピーってわけですね。」

「いや、まあ、確かにそうですけど……」

「迷っている暇はありません。ケータイなり、デンワなり使って今すぐ生徒副会長に連絡しなさい。時間は止まってはくれませんよ」

その言葉に、阿雲はため息を吐きながら自分の弟と目線を合わせ、肩をすくめた。彼からは諦めたようなオーラが漂っており、弟――李織も首を縦に振る。

「分かりました。デンワで兄さんに連絡します」

「よろしくお願いいたします」

ちなみに、デンワとはケータイと違って、誰でも連絡が取れる。しかし、距離制限や伝達速度のタイムラグ、そして場所によって繋がらない場合もあり、ケータイよりも数段、機能は劣る。

そして、阿雲は外道丸の発言で気になった事を口に出した。

「なぜ、ケータイと言ったんですか？　ケータイは使い魔としか使用出来ない魔術ですよね」

「ええ、まあ。そこは――どうでも良いじゃないですか。人間、小さな事に気を取られていたら、大事が見えませんよ」

阿雲の問いに、外道丸は目を細め遠くを見ながら答えた。

第三話二切　ケータイデンワ（後書き）

今、ある小説を本格的に書いています。
ジャンルはミステリー。
これを、某サイトに応募しようかと考えてまして。
ここで公開する予定は今のところありません。

かなり本腰入れて書いてるので、こちらの更新は遅くなるかと思います。

第三話三切　今世紀とは何だ

景色が華やかだ。

京四郎は目の前でバカ面を晒す敵の姿を見て、悦に入っていた。外道丸が言った補正、という言葉の意味は分からない、というか分かりたくないが、とにかくこんなに都合良く物事が進むとは思っていなかった。

もちろん、危機を脱しようと策を巡らせはしたものの、あまり良い案は浮かばない状況だっただけに、外道丸の働きは評価に値する。どういう経緯で外道丸が救世主と知り合ったのか分からないが、彼が生徒会という強い味方を連れてきたのは事実だ。

しかし、油断は出来ない。あらかじめ、外道丸には油断するなと伝えている。なんせ相手は自分の宿敵でもある風紀委員だ。更に、味方をするのが生徒会ときている。

立場上、生徒会と京四郎は敵対するはず。元々、生徒会は風紀委員側の組織だ。風紀委員に指令を出しているのが生徒会と考えるなら、京四郎と生徒会は敵対している事となる。

油断してはいけない。恩返しと銘打ってはいるが、きっと何か裏があるはず。

京四郎は外道丸にある事を伝え、呆然としているファイを憎たらしい表情で見た。

「いやー、ファイ先生はダメだねー。生徒を自分の過失で危険に晒

し、意味の分からない冤罪で生徒に罰を下そうとするなんて」

名目は、自分に罪は無い。これは冤罪で、無実と言い張る。一応、名目は必要であるからこその発言だ。

京四郎という男は、とことん食えない奴である。

そもそも、誰が悪いかと問われれば、何もかも京二郎が悪い。にも関わらず、彼は小悪党のような笑いを発しながら、平気で嘘を言った。人格破綻者なのは自他共に認めるが、ここまで来ると殺されかねない。実際、彼に殺意を抱いているのは、ここにいるファイや風紀委員の方々、その他大勢、数えきれない程にいた。

京二郎は目を細め、京二郎と共に入ってきた人物を視界に入れると、ニヤリと笑った。

「久しぶり、じゃ無いよね。なんて言うべきなのかなぁ？」

「普通に挨拶すべきかと思いますよ、倉野京二郎さん」

自分の名前を呼ばれ、笑みを深くする。それが意味するのは、彼が自分がどういう存在なのか知った上で協力する、という事だ。つまり、明らかな裏切り行為は生徒会の信用に関わるのでしない。

ついこの間会ったばかりの眼鏡は、苦笑いを浮かべながら京二郎と視線を合わせた。その表情からは、何となく諦めの色が見て取れる。

「それより、風紀委員の皆さん、残念ですが彼と彼の使い魔の身柄

は私達、生徒会が預かる事になりました。異論があれば聞きますよ」

その言葉に、ファイは理解出来ないとばかりに吠える。

「風紀委員は生徒会の意思を無視していない範囲での自由を認められているはず！　教師の私が付き添いをしている限り、生徒会はこの件に関して介入は出来ない。いや、そもそも生徒会はこの二人を敵視していたはず！　何故だ！？」

まくし立てるように声を発するファイに、眼鏡と共にいる青年が答える。少し長く、アシンメトリーにしている黒髪、目付きは悪く歯を剥き出しにした獰猛な笑みを見せている。着崩した制服に、その見た目から不良と言っても良い青年だ。

「あァ？　生徒会は介入出来ない、なんて決め事は存在しねェんだが？　俺の聞き間違いかァ？　ファイ先生よォ」

荒々しく、相手を小馬鹿にしたような口調。雰囲気はどことなく京二郎に似ており、鋭さが目立つ。

「元々、正式に決められた事じゃァ、ねェんだよ。それは暗黙の了解だろうが。だから、どちらかが破っても問題ねェってわけだ」

「今まで守られてきたルールを破るつもりか？　お前達は生徒会だろ。答えてもらうぞ、神射（カムイ）。何故、風紀委員との関係を悪くしてまで、この二人を助ける？」

その問いに、青年――神射は鼻で笑う。

「俺は別に、テメェらと仲違いしようが、戦争しようが構わねェ。

困るのは生徒会長だからなァ。副会長の俺は困らねェ」

自己中心的な発言をする神射に、眼鏡こと阿雲は困ったように笑う。

「そんな事を言っちゃダメだよ――兄さん」

今世紀最大の驚きが京二郎を襲った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5665k/

異世界英雄伝説

2011年11月12日08時45分発行